

担当編集者が勝手につくった「内田樹」を読みたくなる冊子

タツル ペーパー



FREE

「私がご機嫌な理由、
教えます。」

内田樹スペシャルインタビュー

完全保存版！

内田樹全著作リスト





内田樹スペシャルインタビュー

私がご機嫌な理由、
教えます。

内田樹さんの本を読んだことはありますか？
まだ読んだことがない方、もしくは全貌をまだ見ぬ方に、
内田樹さんの魅力をお伝えできればと、
ご著作を刊行する出版社の編集担当者が集まり、
書店員の方々に声をかけて、この小冊子をつくりました。
おもしろい本を読んだら、誰かに伝えたくくなる——
そんな単純な気持ちだが、この小冊子のきっかけです。
周りの人と「こんなのあるよ」と楽しんでいただければ。
そんなことを思っています。

いつもどうして
ニコニコしていられるのですか？

——じつは全国の書店さんの「タツラー」というか、
熱心な読者でもいらつしやる書店員の方々からいろん
な質問を預かってきてるんですよ。「なぜ、内田さんは、
いつもそんなに機嫌がいいのですか？」まず、この質
問から答えいただきましょうか。

「うーん、あまりに状況が厳しいので、笑うしか
ないというのがあるんですよ。人間って、不
機嫌な顔をしていると、心身のパフォーマンス
スが下がってくる、だから危機的状況に追
い詰められたときは、もう、とりあえず笑う、
ニコニコする……」

——っていうか、怒らないですよ。内田さんに
パパ怒りされた（注：インタビューは関西出身でちょっとガ
ラが悪い）編集者とか、パパ詰めされて泣きそうになっ

「タツル・クラブ」とは、
内田樹さんの著作を刊行する各出版社の担当編集者が
集まってできた、任意の団体です。

た神戸女学院の学生さんの話とか聞いたことがないです。

「怒らないです」

——なんで怒らないのですか？

「怒らない、というより、怒るといふような状況に立ち至らないようにしている、といった方がいいのか。昔はわりとけんか腰で生きていたところがあって。ナメられちゃいけない、肩肘張って生きてきた、と自分では思ってたけど、まわりの人の記憶では、それほどでもないみたいなんです（笑）。ずいぶん怒りっぱかったから、自分がどうすれば、機嫌が悪くなるかわかっているの、もうならないようにしているというか。どうしても怒りたくなったら、貯めないで、え、どうしてこんなところで怒るの、罵詈雑言を浴びせるようなトコじゃないでしょ、みたいなタイミンで、がおーって怒っちゃうの。でも、それも年に一度か二度、しかも公的な立場というか、学校の会議室

とか、立場上で、ですよ。

個人的なことではゼツ

タイ怒らないです。

——これまでのご発言とか、

インタビュ記事を拝見していると、たしかに昔は怒りっぱかったようですね。合気道をはじめたのも「ケンカが強くなりたかった」って、ノンフィクション作家の後藤正治さんのインタビューに答えていらっしやいましたけど、ホントなんですか？

「あれ、ウソです、ウソ。魔が差してつい、ちょっとそういつてみたんですよ」

——……。

「あのね、そのケンカ云々というのは、多田（宏・合気会本部師範）先生とはじめてお会いしたとき、つまり先生の道場に、暮れも押し迫った十二月に入門したときのことなんですけど、いきなりその年の納会があったんですよ。そのとき先生に『内田くんはどうして合気道を始めようと思った



の？』って聞かれて、『ケンカが強くなるうと思っ

て』って答えたんです。いまにして思えば、先生をちょっと試したんですね。ホラ、不良少年って人を信用してないというか、わざと人を怒らせることをやるでしょ。こんなこと言ったらどんな反応するか、バカなこと言ってもんじゃないって怒鳴るんじゃないか、とか。

ところが、多田先生は『そういう理由ではじめてもかまわないんだよ』ってお答えになった。あこの人は本物だと思いました。つまり武道家として、弟子たちがどんな動機でどんなドアから入ってきてても、自分の弟子である限りは、道を踏み違えることなく武術を極めていくことができる、自分が伝えようとしている武芸への圧倒的な自信があるからなんですよね。でも本当は『そういう理由ではじめてもかまわない』ってことは、

『そういう理由ではじめちゃダメだよ』ってことなんですけどね

（笑）

——それは、おいくつのお話でしたっけ？

「二十五歳の時。それまでいろんな武道の門を叩いたのだけど、多田先生と違って、こちらに踏み絵を踏ますんですよ、査定するというか。なんだ、こんなこともできないのか、とか、知らないのか、とか。だから日本の武道ってこんなもんなのかって失望してたんです。そもそも査定するマインドって貧しくないですか」

——その合気道と「いつもニコニコ」と関係あるのですか？

「もちろん。だって、『けっして怒らず』というのが、多田先生が入会されていた天風会の教えでもあるんですけど、怒らず、といっても怒るのを我慢しちゃいけないんです。さきほどもいったように、怒るといふ心の問題になる前に、そのような状況に立ち至らないようにする。人間、怒ったり、恨んだり、僻ひがんだりすると、心身のパフォーマンス

私が「機嫌な理由」
教えます。

スがとても下がるんです。自分の身体の状態をモニターできない、感じられない人は、怒ると昂揚するから一見、能力が上がったとカンチガイするけど。脳は興奮してる、頭は熱くなっています、身体感度は落ちていてカチコチになっているんですね。怖い顔した人って一見強そうだけどそうじゃないんです。ニコニコしている人間がいちばん強い。いちばん自由に心身が使えるんです。死ぬか生きるか、のときに心身のパフォーマンスをさげてどうする、武道って、100の身体能力を150にする鍛錬なんですから。

坂本龍馬とか西郷隆盛とか勝海舟って、みんな明るいじゃないですか。ニコニコしている人間は自分の身体能力から最大限を引き出す、センサーの感度が高くなる、高くなると、微細なシグナルに反応できみんなが気づかないことに気がつく、いろんな可能性が見えてくる。視野が広くなり、いろんなことが考えられて、つぎつぎとアイディ

アがわいてくる。

過去のルサンチマンというか、ぐちぐち後悔したり、妬んだり、恨んだりして、負けてたまるかと、力んだりしても、心身がぎこちないんですね、やっぱり」

——そういえば来年開かれる道場のお名前は決まりましたか？

「まだ決まってません。多田先生に付けていただくかと思っっているのですけど」

——タツル・クラブ（タツラーな書店員さんと、内田さんの担当編集者有志、このフェアを実施している人たち）の面々では、みんな考えてみてはという意見もあります。「なるほど。公募もありかもしれませんね」

どうして小さな出版社から本を出すのですか？

——さて、次の質問はコレです。「内田さんは、とて

も小さな出版社からもたくさん本をだされていますけど、どうしてなんですか？」

「僕は個人との係わりで仕事をしているので、よい編集者とめぐりあえば、大きい出版社とも小さい出版社とも仕事します。会社との契約でなく、編集者個人との信頼関係をもとに、お互いに、こういうアイデアがあるんですけど、あ、それ面白いね、だったらこうやったらもっといいかも、というような編集者とのコラボレーションが本を出版することだと思います」

——つていうか、ほんとびっくりするところから、とい

えば失礼ですけど、アルテスパブリッシングの

『村上春樹にご用心』の場合なんて、原稿できてから出版社ができたとか、あべこべみたいなこと、あったで

——ところで神戸女学院の先生になったのはなんででしたっけ？

「あれ、ご存じないですか？ 都立大（現首都大学の助手を八年やって、専任の公募があるたびに、北は北海道、南は沖縄まで、国立、公立から偏差値測定不能の私立まで、ありとあらゆる大学に申し込んだんだけど、ゼ・ん・ぶ、落ちたんです」

人間は邪悪でなければならぬのですか？

私が「機嫌な理由」を教えます。



——それって、内田さん、日比谷高校中退して、大検とって、東京大学はいったから、ちょっとズレちゃったのと関係あるんですか？

「当時、学生運動真つ盛りでしょ、で、僕の履歴書を見たら、『あ、コイツあれだろ？』『そうだよ、アレだアレ』『じゃ、バツだ』みたいなことになってたんでしょね（笑）。で、そんな折り、都立大で神戸大学の先生の集中講義があつて、その先生のアテンドを僕がやっただんですね。お昼のお弁当から午後のお茶、夜のお酒までおつきあいしたら、その先生が神戸女学院で講座をもつてた縁で、定年退職するフランス語教授の後釜の公募にすべりこませてくれて。研究内容とか学歴でなくて、飲みっぷりと座持ちの良さが、こんにちの内田を築いてくれたわけですよ」

——るんちゃん（長女）と二人で東京から神戸に来られたのですか。

「三十九歳でるんと二人で神戸に。その一年前のわないと、社会生活が営めないでしょう。たとえば、教育。これって、強制であつたり、催眠術をかけたりますようなことをしないと機能しないですよ。そのとき、それは方便であつて、目的と手段を混同しないために、邪悪な力を自分は使うという『犯意』というか『良識』をもって、使うタイミングとか限度を知らなければならぬと思うんですよ」

——なるほど。ところで、内田さん、ここだけの話、女性の好みというか、「面食い」なんですか？

「美人好きなんです、これが。でも女子大の生徒というより、合気道の師範の立場で、弟子たちと接していた感が強くて、そういう対象じゃないんですよ」

——いいなー。女学院の先生、退官される来年三月まであと少しですががんばってください。（注：ガラの悪い

私が「機嫌な理由」
教えます。

関西人のインタビューは、青年のみぎり、数々の女子アナを輩出しているこの名門



八九年四月に離婚。その年は、昭和天皇は亡くなるし、ベルリンの壁は崩壊するし、そのうちソ連はなくなっちゃうわ、僕は離婚するわ、どうなっちゃうかと思いました。そういえば七五年から、

二〇世紀の残り二十五年は、宗教と武道の時代になると言ってたんだけど、なかなかならなかった（笑）

——でも、そうなりましたよね。さて、最後の質問。「内田さんはご自身の内面は、とても邪悪なんだとカミングアウトされていますけど、人間は邪悪でなければならぬのですか？」

「え、そうかな。自分の心の中の邪悪なもの、攻撃性、暴力性、それをもう少し上げると、人を支配したい、とか、コントロールしたい、影響を与えたいとか、そういう邪悪な力を、ある程度つか

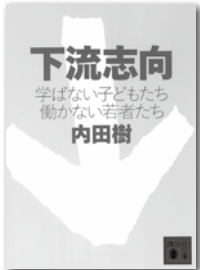
女学校に憧れていたが、一度も門を潜つたことがなかった。

以上、西宮北口駅前の「並木屋」より、「機嫌な理由インタビュー」をお送りしました。

内田樹★うちだ・たつる 一九五〇年東京都大田区下丸子に生まれ、育つ。日比谷高校二年生時に中退、大学入学資格検定をとって、1970年東京大学に入学し、1975年同大学文学部仏文科を卒業。レヴィナスの研究を志し、東京都立大学大学院に進む。大学院生時代には友人の平川克美と「アーバン・トランスレーション」を経営して成功を収める（カバー写真はその当時のもの）。東京都立大学人文学部助手となり、1990年から神戸女学院大学文学部助教授。現在は神戸女学院大学文学部総合文化学科教授。合気道六段、居合道三段、杖道三段の武道家でもあり、神戸女学院大学合気道部顧問を務める。専門はフランス現代思想、ユダヤ人問題から映画論や武道論まで幅広い。

『下流志向』

（講談社2007年1月、講談社文庫2009年7月）



学びも労働も、「わからない」から動き出す。「何の役に立つんですか」その言葉のちっぽけさに気づけたあなたは素敵な野蠻人。（インタビューの担当本）

タツル・カップ 大賞決定！

内田樹さんの新潮新書『日本辺境論』の刊行の際に、書店員様からなにかフェアやイベントをぜひ開いてほしい、という声を多数頂戴いたしました。内田さんの『街場』シリーズを刊行しているミシマ社にも同様の声が寄せられており、これは、と意気投合した担当者同士が業界を横断して、協力して内田樹さんを応援する企画を生み出すべくはじまったのが、「タツル・カップ」と「辺境街場フェア」です。そして！

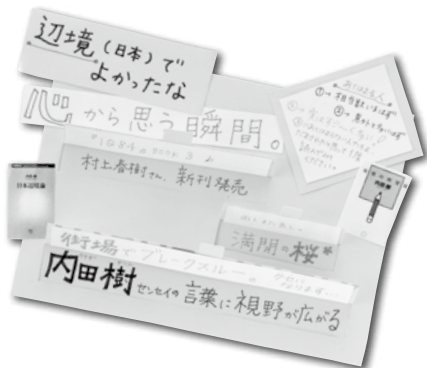
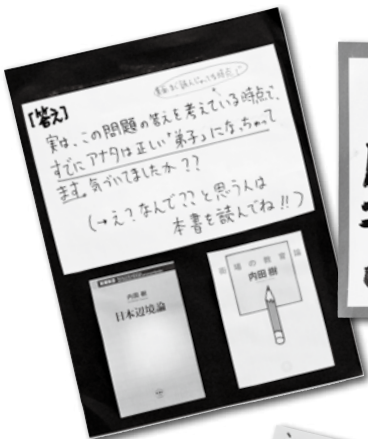
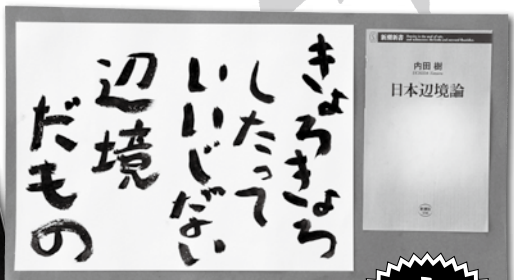
第一回
「タツル・カップ」は、
内田樹さんを交えた
審査会のもとに、
大賞、優秀賞、
ミシマ賞、新潮賞を
決定いたしました。

「タツル・カップ」は、「内田樹さんの本を販促するPOP」であることだけを条件に、幅広く自由にご応募いただいたPOP大賞です。受賞書店員様は、以下の方々です。賞品は「内田樹福袋」を特別に作成いたしました。

参加書店員様に感謝するとともに、謹んでここに報告申し上げます。

大賞

紀伊國屋書店梅田本店
浅山太一さん

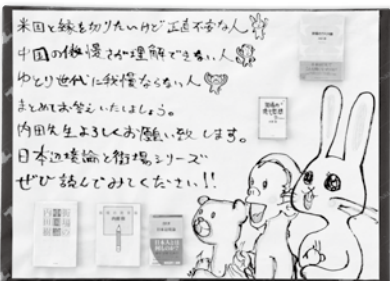


優秀賞

(元)フタバ図書
TERA守谷店
赤塚亮子さん

ミシマ賞

ジユンク堂住吉店
石井宏法さん



新潮賞

今井書店パープルタウン店
尾上今日子さん



合わせて開催いたしました「辺境街場フェア」には、120店舗以上の多くの書店様にご参加いただきました。重ねて御礼申し上げます。

内田樹さんご本人からは、以下のようなコメントを頂戴しております。

「書店の皆様は、日本の宝です。感謝しています。」

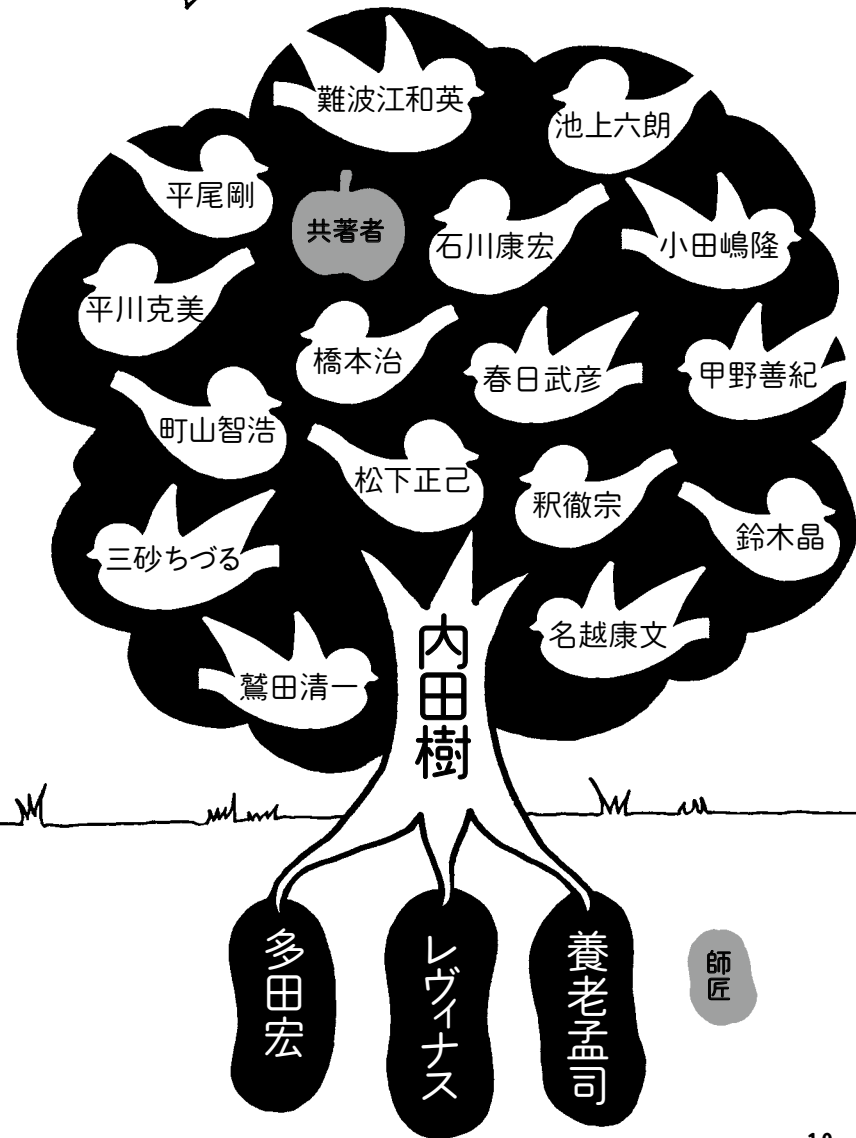
ご協力いただき、心より御礼申し上げます。皆様のさらなるご活躍を祈念しております。ありがとうございました。

平成22年3月吉日

ミシマ社&新潮社

(当時のものを再録)

語り合う樹



師匠

完全保存版!

内田樹全著作リスト

寝ながら読めるタツル本

★コメントは青山ブックセンター本店の平本大悟さんがつけてくださいました。

『街場の現代思想』 (NTT出版2004年7月)

『街場の現代思想』 (文春文庫2008年4月)

『寝ながら学べる構造主義』 (文春新書2002年6月)

『疲れすぎて眠れぬ夜のために』 (角川書店2003年4月)

『疲れすぎて眠れぬ夜のために』 (角川文庫2007年9月)

『知に働けば蔵が建つ』 (文藝春秋2005年11月)

『知に働けば蔵が建つ』 (文春文庫2008年11月)

『こんな日本でよかったね 構造主義的日本論』 (パジリコ2008年7月)

『こんな日本でよかったね 構造主義的日本論』 (文春文庫2009年9月)

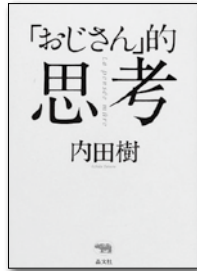
『街場の教育論』 (ミシマ社2008年11月)



一見、「惰性」の強い教育制度こそ、人類叡智の境位。よくわからないならば、それだけで「教育」という名のゲームは、やってみる価値があるということを本書は教えてくれます。

先生、説教お願いします！

『おじさん』的思考』（晶文社 2002年4月）



かつて信じられていたものの。家族、会社、世間、民主主義。一度は「そこ」から抜け出して、やがていとしき「そこ」での観覧。「おじさん」もまた。

『期間限定の思想―おじさん』的思考2』（

晶文社 2002年11月）

『態度が悪くてすみません

―内なる「他者」との出会い』（

角川 one テーマ21 2006年4月）

『ひとりでは生きられないのも芸のうち』

（文藝春秋 2008年1月）

『昭和のエートス』（バジリコ 2008年12月）

『邪悪なもの鎮め方』（バジリコ 2010年1月）

街のおじさん、床屋談義

『日本辺境論』（新潮新書 2009年11月）



「この本を読めば日本がすこしはわかるかな」そう考えたあなたはすでにタフでユニークな「辺境の民」、立派な「日本人」です。「日本人」でよかったですね。

『街場のメディア論』（光文社新書 2010年8月）



メディアがダメになれば、われわれの知性も不調になる。だからメディアを真剣に考える。未来を生き抜く勇気が出る一冊。（編集部）

『街場のアメリカ論』（NTT出版 2005年10月）

『街場のアメリカ論』（文春文庫 2010年5月）

『街場の中国論』（シマ社 2007年6月）

『村上春樹にご用心』（

アルテスパブリッシング 2007年10月）

『逆立ち日本論』養老孟司

（新潮選書 2007年5月）

『橋本治と内田樹』橋本治

（筑摩書房 2008年11月）

武道家タツルの一言

『私の身体は頭がいい―非中核的身体論』（

新耀社 2003年5月）

『私の身体は頭がいい』（

文春文庫 2007年9月）



「天下無敵」とは、敵がない最強のことではない。敵を「つくらない」ことである。そのためにはどうすればいいの？ そうだ。「ウチダ先生の身体」に聞いてみよう。

『身体の言い分』池上六朗（毎日新聞社 2005年7月）

『健全な肉体に狂気は宿る―生きつらさの正体』

春日武彦（角川 one テーマ21 2005年8月）

『身体を通して時代を読む―武術的立場』

甲野善紀（バジリコ 2006年6月）

『身体知―身体が教えてくれること』

三砂ちづる（バジリコ 2006年4月）

『合気道とラグビーを貫くもの―次世代の身体論』

平尾剛（朝日新書 2007年9月）

『先生はえらい』
 (ちくまプリマー新書 2005年1月)



「先生はえらい」から始めてみよう。その「思いこみ」の数だけ、人は無限に「学び」を起動することができるはずだから。

『子どもは判ってくれない』
 (洋泉社 2003年10月)
 『子どもは判ってくれない』
 (文春文庫 2006年6月)

『14歳の子を持つ親たちへ』
 名越康文 (新潮新書 2005年4月)

『狼少年のパラドクスーウチダ式教育再生論』
 (朝日新聞社 2007年2月)

『下流志向ー学ばない子どもたち働かない若者たち』
 (講談社 2007年1月)

『下流志向ー学ばない子どもたち働かない若者たち』
 (講談社文庫 2009年7月)

『大人のいない国ー成熟社会の未熟なあなた』
 鷲田清一 (プレジデント社 2008年10月)

これがタツルの専門です。

『現代思想のパフォーマンス』
 難波江和英 (松柏社 2000年3月)

『現代思想のパフォーマンス』
 (光文社新書 2004年11月)

『ためらいの倫理学ー戦争・性・物語』
 (冬弓舎 2001年3月)

『ためらいの倫理学ー戦争・性・物語』
 (角川文庫 2003年8月)

『レヴィナスと愛の現象学』
 (せりか書房 2001年12月)

『女は何を欲望するか?』
 (径書房 2002年11月)

『女は何を欲望するか?』
 (角川oneテーマ21 2008年3月)

『他者と死者ーラカンによるレヴィナス』
 (海鳥社 2004年10月)

『私家版ユダヤ文化論』 (文春新書 2006年7月)

『死と身体ーコミュニケーションの磁場』
 (医学書院 2004年10月)



人間は、よくわからないもの。「死者」とコミュニケーションすること初めて人間足り得る。真の知性とは結論がでないことに耐える能力であることを本書は教えてくれます。

お友だちたちと

『大人は愉しいーメル友おじさん交換日記』
 鈴木晶 (冬弓舎 2002年6月)

『大人は愉しい』 (ちくま文庫 2007年8月)

『東京ファイティングキッズ』
 平川克美 (柏書房 2004年10月)

『東京ファイティングキッズ』
 (朝日文庫 2007年5月)

『東京ファイティングキッズ・リターン』
 ー悪い兄たちが帰ってきた

平川克美 (ベジリコ 2006年11月)

『東京ファイティングキッズ・リターン』
 ー悪い兄たちが帰ってきた (文春文庫 2010年1月)

『いきなりはじめる浄土真宗』
 ーインターネット持仏堂

釈徹宗 (本願寺出版社 2005年3月)

ご参加書店員さん（五十音順）

浅山太一（紀伊屋書店梅田本店）、池松美智子（紀伊屋書店新宿南店）、石井宏法（ジュンク堂書店住吉店）、伊藤稔（紀伊屋書店札幌本店）、大内達也（ジュンク堂書店池袋本店）、奥村友彦（BookDepot書楽）、尾上今日子（今井書店パープルタウン店）、門脇順子（有隣堂ヨドバシAKIBA店）、久保亘（三省堂書店成城店）、黒澤亮平（丸善ラゾーナ川崎店）、芝健太郎（フタバ図書MEGA 祇園中筋店）、篠崎凡（三省堂書店神保町本店）、関根明子（丸善お茶の水店）、遠山秀子（山陽堂書店）、永瀬敏章（元有隣堂ミウイ橋本店）、中山英（萬松堂古町本店）、服部寿美（紀伊屋書店横浜店）、原田亜紀子（ジュンク堂ネットストアHON）、平本大悟（青山ブックセンター本店）、藤井絵里佳（紀伊屋書店新宿南店）、松本邦弥（今井書店）、松本梨加（啓文堂書店明大前店）

この小冊子はこの方々のアイディアから生まれました。
お忙しい中ご参加いただき、心より感謝申し上げます。
また、ご機嫌に協力くださった内田樹先生、
ほんとうにありがとうございました。



デザイン・装丁 加藤愛子（オフィスキントン）
写真提供 新潮社（内田樹さん、POP）、内田樹さん（カバー・昔の写真）
発行日 2010年8月10日
発行人 タツル・クラブ
医学書院・白石正明、講談社・加藤晴之、
光文社・森岡純一、新潮社・足立真穂、筑摩書房・吉崎宏人、
文藝春秋・大村浩二、ミシマ社・三島邦弘
印刷・製本 豊国印刷

この小冊子は、書店店頭配布用に作成された非売品です。

データは各社ホームページにて8月中旬より公開される予定です。
ダウンロードの上、ご自由にお使いください。

お友だちたちと

『はじめたばかりの浄土真宗』
—インターネット持仏堂2』

釈徹宗（本願寺出版社2005年3月）

『現代霊性論』 釈徹宗（講談社2010年2月）

『現代人の祈り—呪いと呪い』

釈徹宗、名越康文（サンガ2010年7月）

『若者よマルクスを読もう—20歳代の模索と情熱』

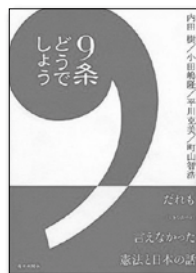
石川康宏（かもがわ出版2010年6月）

映画も好きです

『9条どうでしょう』

小田嶋隆、平川克美、町山智浩

（毎日新聞社2006年3月）



「憲法9条」と「自衛隊」。その両極間での「葛藤」が戦後日本に世界史上類例のない「現在」を導いたことを本書四人の「変わったこと」の先輩方は教えてくれます。矛盾であることは愛しい存在なのです。

『映画の構造分析』

—ハリウッド映画で学べる現代思想』
（晶文社2003年6月）

『映画は死んだ—世界のすべての眺めを夢見て』

松下正己（いなほ書房1999年12月）

『新版 映画は死んだ—世界のすべての眺めを夢見て』

（いなほ書房2003年8月）



イラストは、内田樹さん御本人の手によるものです。